第2部：最新のソフトウェア事例7

「すぐ、できるまでやる」を実践できるPDMパッケージ「FullWEB-PDM」の特徴と事例

コネクテッド　森　吉弘*
*もり　よしひろ：代表取締役社長

FullWEB-PDMのコンセプト・アーキテクチャ

これまで紙図面と部品表（Excel）で管理していた製品構成を、PDMで管理するのは単なるデジタル化に分類される。ただ、デジタル化がスタートであっても、そのデジタル化したことで、さまざまな発想が湧き出し、システム間連携が起き、これまでにないDX（ソリューション）が生まれることを、たくさんのユーザーの現場で見てきた。

「すぐ、できるまでやる」を実践できる製品は

表1　FullWEB-PDM開発年表

年	製品名	説明
2000	ChronoStar	クボタに在籍していた当時に開発した文書管理システム。Windowsアプリ。80システム程度を販売した
2003	Connected	コネクテッド創立
2004	FullWEB-ChronoStar	WindowsアプリであったChronoStarとGUIもデータベースも完全互換で、ブラウザ(IE)から実行できるシステム
2005	PDM-ChronoStar	図面管理システムを導入したユーザーから、部品表も管理したいという要求が複数あったので、ChronoStarが部品表(BOM)を扱えるように拡張した。WEB版とアプリ版を開発したが、アプリ版がBOMツリーを大量高速表示できたので、WEB版は見送った
2006	FullWEB	すべてのコードを自社開発。データベースは従来と完全互換
2008	FullWEB-PDM V1	WEBブラウザでBOMツリーを表示可能とした。BOMツリーの編集は、PDM-ChronoStarを併用
2011	FullWEB-PDM	BOM関連のすべてのコマンドをWEBブラウザで実行できるようにした。SDKを利用してユーザーカスタマイズが可能
2011	Auto-Test	FullWEB用のRPAツール(ローコード開発)を無償提供
2012	FullWEB5.0	全文検索機能強化
2015	FullWEB7.0	行属性機能追加(親子関係が同じでも、BOMの行ごとで属性値を持つことができる機能)。Windows10対応
2019	FullWEB9.0	Chrome、Edge対応(IEが近々、廃止になることを予想して)
2020	FullWEB9.1	ディープラーニングを用いた手書き文字認識機能搭載
2022	クラウド版	クラウド(Azure)上でのサブスクリプション販売開始
2023	FullWEB-X	(開発中)動作状況を監視し、不具合などを事前に回避する版